

令和8年度黎明館企画特別展事業概要

1 名称 「かごしま いきものがたり」(仮)

2 主旨

鹿児島の人びとは、古くから多様ないきものとともに生きてきた。海に囲まれ、火山と森を抱くこの地では、いきものは食や労働の相手であると同時に、祈りや語りのなかにも息づく存在になっている。本展では、人といきものが、生活の場や信仰の場でどのように関わってきたのかをたどる。

里、山、海・川の暮らしの中では、いきものは身近なものであると同時に、危険あるいは人の手に負えない存在でもあった。いきものから労働力、肉・毛皮といった恵みを受け取りながらも、作物を荒らされときには命の危険にさらされることもあった。

また、祈りの場では、山や海から十分な恩恵を受けられるように、命を奪ったいきものに対して供儀・供養を行い、感謝を捧げると同時に畏敬の念をこめて接してきた。祭の場では、神馬や神牛など、いきものが神聖な力の象徴として登場する。鹿児島県内各地で行われる打植祭りや流鏝馬などに見られるように、いきものは神と人をつなぐ媒介となってきた。さらに、伝承や語りの中では、いきものたちは教訓を伝え、境界を越えて人の心を映す存在として描かれている。

人といきもの関係は、時代やそれぞれの生活、信仰の場において変化しながらも、互いのいのちを見つめ合う関係として続いてきた。現代において、私たちはこれから、いきものとどのように向き合い、生きていくべきか。本展は、その問いをともに考える場となることを目指す。

2 主なターゲット、目標来館者数

本展示は、小学生から中学生、高校生とその家族をターゲットとし、家族で展示を見ることで、現代の課題や未来の姿をともに考える機会になることをねらいとする。そのため、文字を中心としたパネルやキャプションではなく、幅広い世代が理解できるよう、図や写真、映像などを用いた展示の演出を行いたい。

目標来館者数：7,000人

3 会期

令和8年9月29日(火)～11月3日(火)(36日間、実観覧日32日間)

※ 休館日：10/13(火)・10/19(月)・10/26(月)・11/2(月)

4 会場

鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2階第2特別展示室(579㎡)

5 主催

令和8年度黎明館企画特別展実行委員会(令和7年度と同様の組織を想定)

6 展示構成（別添のとおり）

第1部 かがしまのいきもの

第2部 暮らしといきもの

第1章 人と里のいきもの

第2章 人と山のいきもの

第3章 人と海・川のいきもの

特別展示 いきものをかたどる

第3部 祈りと語りのいきもの

第1章 祈りと祭礼のいきもの

第2章 語りのいきもの

第4部 続く，かごしまいきものがたり

7 展示点数

約150点（予定）

8 関連行事

(1) 記念講演会①

日時：令和8年10月3日（土）

会場：黎明館2階講堂（245席）

講師：安田章人氏（九州大学基幹教育院准教授）

演題：「未定」（狩猟の場から考える生き物との共生について）

(2) 展示解説講座

日時：令和8年10月10日（土）

会場：黎明館2階講堂（245席）

講師：黎明館主査 古殿志賀子

演題：「かごしま いきものがたり」（仮）

(3) 記念講演会②

日時：令和8年10月17日（土）

会場：黎明館2階講堂（245席）

講師：香川雅信氏（兵庫県立歴史博物館学芸課長）

演題：「未定」（妖怪になった動物について）

(4) ワークショップ

日時：令和8年10月24日（土）

会場：黎明館3階講座室

講師：消しゴムはんこ作家 横手順子氏

内容：生き物，生き物を象った郷土玩具をモチーフにした消しゴムはんこの作成。

令和8年度黎明館企画特別展「かごしま いきものがたり」展示内容及び 主な展示予定資料

◎第1部 かごしまのいきもの

生き物の剥製を中心に展示。資料の背後に里や森、海の画像を貼り出すことで自然を想起させ、展示への導入とする。



タヌキ（剥製）

◎第2部 暮らしといきもの

里（農耕）、山（狩猟）、海・川（漁労）のそれぞれの生活・活動圏での人と生き物が関わる場面を当時の道具類を中心に展示する。展示で取り上げられる事例や道具は、人が生き物を労働力、生きる糧とし、その恵みを受け取りながら生活していたことを示している。しかし、ここでの生き物との関係は恵みが享受されるだけの穏やかなものではなく、様々な信仰や祈り、生き物への供養の中に、感謝や畏れが入り混じった感情があったことを紹介する。

当時の様子をより理解できるように、写真や図解パネルを用いて、イメージしやすい展示を目指したい。



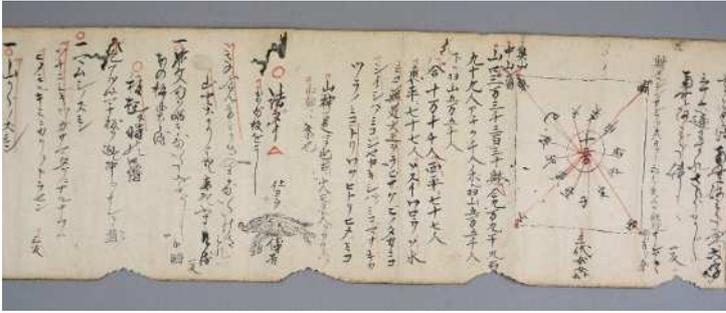
四季耕作図（木村探元筆）



犁



モグラ打ち棒



山之神御本地



シカノヨビブエ



ガネテゴ



サワラエギ

◎特別展示 いきものをかたどる

日本人は古くから、生き物を人になぞらえ、表現してきた。とくに生き物の擬人化は、生き物を人間と同じように命や心をもつ存在とみなす、日本的思考の現れである。人々が生き物を「願いを叶える特別な力をもつもの」として表現した、郷土玩具のコレクション（黎明館蔵・県指定有形文化財）と生き物を描いた絵画の展示を行う。



「玩具コレクション」よりいきものを象ったもの

◎第3部 祈りと語りのいきもの

県内各地で行われる打植祭や流鏝馬などでは、生き物が神の使いとして祀られ、さらに地域の安寧や豊作の願いが託される。祭礼に登場する神馬や神牛は人と神をつなぐ象徴であり、神聖視されている。祭りで使われる衣装や道具など、祈りの空間を構成する資料を展示し、人と生き物、神が共にある様子を示す。

また、県内に伝わる生き物が登場する伝承や昔話、それを想起させる資料を展示し、創造・想像のなかの生き物たちの姿を紹介する。



カギヒキ祭り牛の模型



馬頭観音像

県内祭礼道具・パネル



加紫久利神社【出水市】



太郎太郎祭【薩摩川内市】



流鎚馬【日置市】



河童之手足【都城島津邸】



しづのおだまき
倭文麻環

◎第4部 続く、かごしまいきものがたり

ここまでの展示で紹介した、各事例に言えることは、かつての人々の周りにはたくさんの生き物がおり、人々は生き物たちの存在を常に感じながら生活していたということである。

現代の私たちの暮らしはどうか。生き物たちが山から下りてきて農作物を荒らす、あるいは人を傷つけたというニュースは大きく報じられ、「獣害」「鳥獣被害」として注目を集める。「こんなところに動物が下りてくるなんて…」、「ここに動物がいるはずはない（出るはずはない）」、という考えの背景には、自然と人との間に距離が生まれ、生き物たちの存在を感じにくくなった、私たちの暮らしが影響している。第4部では、私たちが「被害」と捉える生き物との関わりを、これまでの人々はどのように捉え、生活や生業の中で実践してきたかをパネルや写真等を使って紹介し、これからの私たちの生活と生き物との関係を問いかけ、展示の締めくくりとしたい。

【パネルや写真で事例を提示】

◎山へ入るときに咳払いをする

山の中にいる動物たちに、人が入ったことを知らせる獣除けの効果があると同時に、山は人の領分ではないという意識の表れであることが指摘されている。人と獣の不要な鉢合わせを防ぐ、距離の取り方の事例。

◎イノシシの千匹塚

イノシシを1,000匹仕留めた人が、供養のために建てる塚。千匹塚の前で酒を供えて祈ったり、獲物が獲れたときは塚の前で空砲を鳴らしたりした。人の糧となったイノシシへの慰霊と感謝を表すと同時に、獲物を安定して得ることができるよう祈りを捧げる場であった。

◎小さな生き物を追い出さない

奄美の集落では、家の周囲に林や草地を残し、小さな生き物の居場所とした。

「ネズミが家を留守にすると良い事はない」「天井から下がってきたクモは縁起が良いので殺さない」どの言い伝えから、小さな生き物は日常的に家の中や周囲におり、それらをむやみに殺さず、いるものとして受け入れる感覚が共有されていた。

◎稲・畑へやって来る生き物への「脅し」 カカシ、モグラウチ行事

主に水田に置かれたカカシや鳴り物は、鳥を田畑に近づかないようにする装置。これらの装置は、完全に追い払うものではなく生き物に、人の気配を感じさせ、近づきにくくするための存在。小正月に盛んに行われるモグラウチでは、春が近づき活動を始める時期に入るモグラやネズミなどの小動物に対して、人の存在を知らせ、田畑のある里から距離をとらせる意味があった。

これらの事例に共通するのは、

- ・ 生き物を完全に排除しない
- ・ 自然を制御できるとは考えない
- ・ 人が一歩引く場面を持つ

という姿勢である（オドシ、イノリ）。現在起こっている「獣害」や「鳥獣被害」は、こうした人々の姿勢が、生活文化から断ち切られた場所で起きているともいえる。

人口減少や高齢化により、これまでのような里山や田畑の管理が難しくなり、人の気配が薄れたことが人の生活圏への鳥獣の侵入につながり、さらにそれらを追い出し、距離をとるような方策をとることができなくなった。

「獣害」・「鳥獣被害」は、人の暮らし方や社会の変化から、人と生き物の関係性、人の生活圏と生き物の生活圏のバランスが保てなくなったことが表面化した現象である。これからの私たちにとって、人と生き物の境界を調整し、互いに折り合う知恵を見出すことが大切になってくる。